第１０回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議　議事録（発言要旨）

１　会 議 名　　第１０回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議

２　開催日時　　平成２８年９月２３日（金）　午後１時３０分から午後３時３０分まで

３　開催場所　　宮城県行政庁舎　４階　特別会議室
（仙台市青葉区本町３－８－１）

４　出 席 者　　別紙「出席者名簿」のとおり

５　概　　要　　以下のとおり

（１）開　　会

（２）開会の挨拶（挨拶：西村教育次長）

（３）出席者紹介（進行）

（４）報　　告（報告者：鈴木企画班長）
①　平成２８年度「幼児教育に関わる実態調査（アンケート）」の結果について
資料１－１，１－２に基づき報告
②　平成２８年度　第２期「学ぶ土台づくり」推進計画
幼児期の保育・教育に係る事業集（県関連事業）（市町村関連事業）について
資料２－１，２－２に基づき報告

（５）意見交換（司会：川島隆太座長）
テーマ：「幼児教育の充実のための環境づくり」について

（６）そ の 他

（７）閉　　会

―以下意見交換発言要旨―

意見交換

≪　川島座長　≫

・　本日の意見交換のテーマは「幼児教育の充実のための環境づくり」である。
・　事前にアンケート調査にお答えいただいた回答については，資料３にまとめてある。

・　最初にそれぞれの団体等における取組状況，課題について一人３分を目安にそれぞれ発言いただければと思う。では，小泉先生から順番にお願いしたい。

【　尚絅学院大学　小泉准教授　】

・　尚絅学院大学は保育園，幼稚園，小学校の教員，保育士になる学生を養成している大学である。以前は短大の大学だったが，４大で子ども学科という名称になり，４年間で保育士，小学校教員になるための勉強をしている。保育ができる保育者を育成するだけではなくて，具体的に自分から保育を構築できる保育者の育成という形で重点が移動してきている状況である。具体的に自分から保育を構築するとは，保育の場面でいろいろな問題に対して自分でしっかりと調べて問題を整理し，子どもとの関わりの中でどう解決していけばいいかというようなものである。

・　環境教育の部門としては，昨今震災関係で見られる放射能汚染等だけではなくて，雨が多くて崖が崩れたときにどういうふうに対応するかとか，様々な問題に幼稚園の教員とか保育士が具体的にどう関わっていけばいいかといったことに，演習のような形で少し取り組んでいる。

・　課題としては，昨今の大学生は，本当に自然体験をしていない。ちょうど今の大学生の子どもたちというのが，２００４年くらいの時期の全国的に運動ができない子どもと言われた時代の子である。自分たちも非常に運動能力が低く，自然体験も少ないのに教員になるという中で，どう自分も体験してみて，子どもたちにそれを伝えるかというのが難しい問題になっている。さらに，理科離れというのも少し目立っている。

・　子どもたちと関わりながら様々な自然体験をさせていく中で，学生自身がまず関わるよう自然体験を盛り込んだような演習型の講義というのを最近している。例えば学生だけでなくて地域の方々や教員も巻き込んで，大学の敷地の中の森林を，子どもや地域の方が入って来れるような空間にしようと，休日などにみんなで集まって木を切り出して，木道を整備したりとかしている状況である。

【　宮城県国公立幼稚園・こども園協議会　伊藤副会長　】

・　園内研修の充実とスキルアップを目指した研修を深めることに力を入れている。

・　幼保小の交流や連携を図るため，公開保育や授業，保育所との交流会，他の施設の幼稚園との交流会を取り上げ，年長児が小学校に行き，見学，交流を深め，給食体験なども行っている。さらに職員の資質向上を図る研修の充実を図っている。それから就学時前の引継ぎということで，小学校入学までに，引継ぎ会や情報交換を密にするということに心がけている。また，アプローチカリキュラムの計画を立てて，実践につなげるようにしている。

・　地域の人材や自然を積極的に活かした保育活動の充実のため，地域ボランティアとの交流として，自然と地域人材の活用，園の農園活動，園外保育，地域や関係団体との交流なども行っている。

・　大事なこととして，園舎内外の環境整備，定期的な安全点検の実施ということを心がけている。

・　特別な支援を必要とする園児への対応に関する職員研修の実施に当たり，特別に配慮を要する子どもを含めて，個々に応じた指導の充実を図るための体制づくり，職員間の共通理解

を深めることに力を入れている。

・　課題としては，正職員が不足しており，非常勤職員が担任をしているところが多く，多様な勤務体制のため，運営していく上で難しさを感じている園が多いこと。こども園への入園が多くなり，国公立幼稚園の入園児が減少し，園児数が少ないことで，年齢に応じた集団生活が担えないことが課題である。それから，特別な支援を必要とする園児に対する職員の配置が不足しており，なんとか担任がやりくりして行っているというのが現状である。

【　宮城県私立幼稚園連合会　吉岡常任理事　】

・　幼稚園の立場の人間として，県の教育委員会に，速やかに提案してくれるといいなと思うものが，宮城県や仙台市としても目安になるアプローチカリキュラムである。学びの芽生えを作りなさいという幼児教育の課題に対して，アプローチカリキュラムが編成されていない。学校に入るために必要不可欠なもので，学習をしなさいというようなアプローチカリキュラムではない。アプローチカリキュラムがあって，初めて幼稚園の教育がこういう考え方で学校に送り出す，それが今大切なことだというのが分かる。幼児期に自然体験の根っこを作り，興味関心を作る部分に関して，教育委員会なりの示唆的な目安があるとよい。幼稚園，保育園それぞれの考え方があるが，幼稚園の中でも，保育園の中でも，教育要領や保育指針に基づいてということだけでなく，生身の経験や判断が出てこないと，子どもの育ちというのがおかしくなっているように私は見ている。できさえすればいいということではなく，協力する部分や協調できる部分がもっと子どもの言葉から聞こえ，関わりから見えるような部分を作らないと子どもの成長はない。アプローチカリキュラムの考え方に，当宮城県の盲点があるなということを感じている。

≪　川島座長　≫

・　もう少し吉岡委員の考えているアプローチカリキュラムのイメージを具体的に伝えてもらえないか。

【　宮城県私立幼稚園連合会　吉岡常任理事　】

・　アプローチカリキュラムは，学校につなげていくために，どういう子どもの育ちを考えなくてはいけないかということ。心情・意欲・態度という部分が教育要領にあるが，その文言の表示の言葉ではなく，学校に行ったら学ぶということがどういうことなのか，学校に行ってみんなと遊ぶとはどういうことなのかということを，幼稚園，学校の中でのそれぞれの様子をはっきりするとよい。

・　宮城県の場合も仙台の場合も，強く出ているのがスタートカリキュラムで，それのみ学校の先生が知っている。アプローチカリキュラムはうちの園も作っているが，学校の先生が知っているかどうか。学校側では文字を教えなくてもよいと言いながらも，今もう子どもたちの方は文字先行で，学校の先生も文字を教えるのに難儀している。もう少し家庭教育を巻き込むようなアプローチカリキュラムができるとよい。幼稚園や保育園だけでなく，家庭に子どもの育ちはこうなんだというもの。具体的に話をすると，９時前に寝せないと子どもの脳は発達しませんとか，欧米やアメリカでは，朝食で日本食が評価されているが，キレない子にするにはこういうものを提供したらどうかとか，もっと自然な，今まで自然

にあったことが，カリキュラムの中に入ってくるといいと思う。

【　宮城県保育協議会　中鉢会長　】

・　保育協議会として幼稚園とも似たようなところもあるが，田舎に行けば行くほど，保育所，保育園は教育なんかしない，ただ子どもを預かっているんじゃないかということがある。やはり，０，１，２歳の教育が大事ということで，「保育所，保育園は，乳幼児の教育に力を入れ，養護と教育が一体になったのが保育である」と研修会がある度に保育士に言っている。

・　子どもが育つ家庭，育てる家庭は様々だが，一番の問題は，やはり就寝時間，起きる時間である。あらゆるところに行って保護者に口をすっぱくして言っているが，なかなか理解されない。例えば１０時以降に子どもを連れてファミリーレストランとかそういう飲食店にいる。県の条例で１８歳未満は１０時以降歩いていると補導される。少年補導指導員もやっているので，これを保育所あるいは研修会で常に保護者に伝えているが，なかなか保護者は自分の都合や自分の思いで子どもを引き連れ回している。これが一番の今宮城県，日本における課題と思っている。

・　ルルブルについて幅広く浸透させるためには，保育所，保育園で広報活動，啓蒙活動が一番と思っている。とにかく大人，保護者，保育者，親が根性を見せ，たった５年６年のことだから，「子どもは８時前には寝せる。」「このことを怠ると大人になっていろんな問題を起こす青少年が出てくる。」「しっかり６時に起こして，朝ごはんを食べさせて，幼稚園，保育園，保育所に通わせるんだ」ということをお願いしていくつもりである。これからも機会があるごとに，８時前の就寝，朝６時に起床し朝ごはんを食べさせるという活動を続けていきたいと思っている。

【　宮城県小学校長会　片山理事　】

・　校長会ということで本日参加させていただいているが，県内の小学校全て市町村立の小学校で，私の場合は柴田町ですので，柴田町の取組などをちょっと交えながら現状と課題をお話しさせていただきたい。

・　施策の重点事項にもなっている幼保小の連携，接続の件だが，大きくはまず相互理解が重要と考えている。交流する機会を意図的，計画的に設けること。アンケートには年度末の引継ぎが圧倒的に９割を超えているが，そればかりでなく，目的をもって意図的に交流をする。特に柴田町では，幼保小連絡会というものがあり，会議等も行うが，例えば５月，６月に幼稚園の先生が小学校を訪問し，３月の引継ぎの時点との変容なども見ながら，新たにいろいろ情報交換を行う。そして年末には，小学校の教員が今度どんな子たちが入ってくるか幼稚園に行き，あと２，３か月でもう少し育ててほしいところを伝えてくる。その時々の子どもの発達の様子などを見ながら，意図的，計画的な交流が相互理解につながるのかなと考えている。

・　カリキュラムで教員は動いているわけだが，実際には，アプローチカリキュラム，スタートカリキュラムという名前は付けていなくても，それぞれ互いを意識しながら行っている。ただ，アプローチカリキュラム，スタートカリキュラムと銘打つことによって，接続期のカリキュラムとして接続期の目的をより明確にし，より行っていることを整理し，そしてより具体的にすることができる。できればその学区内だけでも幼保と小学校が一体的なつながり

のあるアプローチからスタートのカリキュラムを作るということが重要と考えている。どうしても小学校だと，低学年の方に行きがちだが，小学校６年間のベースと考えれば，全校で共通理解して，幼児教育というものを知っておくことが長い目で見るととても重要だと思う。課題の方には，幼児教育の目標や内容の理解がまだちょっと不十分ということを挙げている。

・　４月から隣接幼稚園の園長も兼務しているが，実際に幼稚園に行ってみると，特別支援教育のことが大変話題に上る。特に自閉症，スペクトラム障害でなかなか外面的には見えないもので対応に苦慮し，困るということが実際にある。特別支援教育は重点事項の施策９にもあるので教育委員会と福祉の関係機関，医療あるいは相談等の専門機関，臨床心理士，保健師等も巻き込んだ幅広い連携をしていくことがこれからの幼児教育には重要と感じている。

【　宮城県児童館連絡協議会　我妻副会長　】

・　児童館，児童センターは，０歳から１８歳までの全てのお子さんが利用できるところになっている。そして宮城県は児童センターで放課後児童クラブを一緒にやっているところが多い。放課後児童クラブは，保育所的にお子さんを預かって毎日来てもらって，子どもを保護者の人が迎えに来るまで預かるということをやっている。ここ２，３年，６年生までのお子さんを預かることになっているところがほとんどだと思う。児童センターは，保育所と一緒になっているところとか，放課後児童クラブ単独であるところとかいろいろある。

・　市内の保育所とは連絡や子どもたちの情報交換はできる。私立の幼稚園との情報交換もしたいが，なかなかうまく進んでいない。幼保小連絡協議会というのはあるが，入っていない。一同に介して情報交換し，子どもたちのつなぎ目のない援助をしているところもあるので，名取でも児童館も入れたらいいと思っている。

・　悩みとしては職員が少ないこと。職員が必要で募集はするが，放課後児童クラブが７時までになってからは，働いてくれる方を探すのが大変というのが現状である。もっといろんな年齢の職員や男の職員も入って，子どもたちにいろんな体験をさせてあげたいとは思うが，身分が嘱託，臨時ということが多いので難しい。職業としての保障が不足しているところもあって，職員が不足と思っている。

・　児童館は非常に地域とのつながりが必要なところである。もちろん学校との関わりも必要だが，各児童館は将棋とか遊びとかコーラスとか，いろんな教えてくださる方との交流や地域の老人クラブとの関わりが非常に大事である。名取の場合は，館長のサイクルが短く，地域との関わりが十分持てないうちに異動してしまうことも課題と思っている。

【　宮城県私立幼稚園ＰＴＡ連合会　佐藤研修部長　】

・　現状の取組として，我が園では，仙台市の方で推進している家庭学級というものがあり，市の方から支援金をいただいて，年間でその内容に合った保護者対象，園児対象の勉強会やいろいろな催しを行っている。近年，内容によっては保護者の参加率が低くなっている。平日の昼間ということで，参加できないという感じが多い。お母さんが来ていない子には先生たちが付いていてくれるが，子どもたちはちょっと寂しそうなので，父母会としては，親子対象の催しの機会を少なくするべきかと検討している。

・　これもこども園ならではだと思うが，その地域の子どもが近隣の園に入園する昔とはちょっと違っていて，保護者の仕事などの都合で，他の地域からもたくさん園に来ており，幼稚

園から小学校へ進学するに当たって,友だちづくりから始めなければならないこともちょっとした課題と思っている。

【　宮城県ＰＴＡ連合会　佐々木副会長　】

・　宮城県ＰＴＡ連合会としては，今，子どもと保護者そして地域，先生方たちとうまくコミュニケーションが取れていないのではないかということで，１０月３０日の大崎大会で品田奈美先生をお呼びして，コミュニケーションづくりについて講演いただくことになっている。午後はニホンジンプロジェクトという団員の方にお願いして，ステージと保護者との間で小さな劇を作りながら，コミュニケーションを取っていこうというような形で講演を開くことになっている。

・　課題としては，放課後児童クラブでも幼保小の子どもを預かっていているが，幼保小連携の中には入っていない。同じ子どもを預かって，午後１時半か２時ぐらいから６時までお預かりしている。私たちがいただける情報は，校長先生によって教えてくれる学校の体制や学校によっては，個人情報のため教えてくれない状況もある。私たちから見て支援が必要なんじゃないかと思っている子どもについても，情報がないために，その子に合った保育の仕方ができないような状況にある。県の方にお願いするとすれば，幼保小の中にも，ぜひ子育て支援課の状況，活動を組み込んでいただけると私たちも活動しやすいと思っている。

【　気仙沼教育委員会　今野課長　】

・　気仙沼市教育委員会としては，まずは家庭教育に関しては生涯学習課を中心に子育てほっとサロンなどいろいろ行っている。

・　学校教育課としては，幼稚園の方の課題が大きくある。合併市町村なので，旧唐桑町の場合は，保育所型の幼稚園，旧本吉町の場合は，小学校に等しいような幼稚園だった。旧市としては，幼稚園に関しては私立のみで，公立は保育所のみの経営だった。合併した途端にその２つの幼稚園の経営の違いを一本化するのに約３年かかっている。

・　そのほか保健福祉部局の保育所との連携が今一つ取れてないところがあり，それが人事交流の滞りにつながっている。したがって，気仙沼市としては，今後幼児教育の推進整備を進めていくに当たり，文科省の方から３年間で１，５００万円の委託を受けて，これを機会に斬新的に幼保一体となり，改革していく予定である。

【　宮城県保健師連絡協議会　狩野会員　】

・　保健師連絡協議会の会員として参加させていただいているが，ここで挙げさせていただいた現状と課題については，富谷町で行っていると御理解いただければと思う。

・　富谷町の町立幼稚園と小学校，保育所との連携に関しての取組状況として，幼稚園は２か所あるが，その１か所の幼稚園と小学校はかなり密に連絡を取り合っている。来年小学校に上がるお子さんの中で，特に支援の必要な幼稚園児に対しては，小学校の教頭先生やコーディネーターの先生が，常時いつでも保護者の相談を受けている。また，学校で主催する発達の研修会等に幼稚園へも参加案内の話がある。また，幼稚園と同じような環境でお子さん自身が落ち着いた環境で勉強に取り組めるようにと,同じ環境づくりができるような取組もなされているとの報告を受けている。ただそれが１か所に限られており，他の幼稚園や保育所

と小学校がそういった連携が全て取れているかというと，まだ十分ではないので今後の課題になると考えている。

・　保健師という立場で言わせていただければ，今，発達に気になるお子さんというのがかなり増えている。どこの自治体でもそうかと思うが，３歳児検診などでお子さんを見ていると，以前に比べて非常に落ち着かない。２０年くらい前の３歳児検診は，ほとんどのお子さんが何も問題無くて，ある意味早く終わる検診であったが，今は本当にじっとしていられるお子さんが少なくなっている。それが発達によるものなのかどうなのかというのを見極めるのに非常に時間がかかるという話を保健師たちからは受けている。本当にその子の持っているものなのかと考えたときに，小さい頃に，「どこまで言って，親としてどこまで注意したらいいのか」「どういうふうにしつけたらいいのか」とかお母さんたち自身が分からなくなってきているのがすごく感じられる。お母さんたちはすごくまじめで，ものすごく学歴も高く，決して理解されないわけではないが，子育てに関して言えば，周りに小さい子がいなかったり，接する機会がなかったりと経験がまずない。また，特に富谷の場合は，引っ越して来て，周りに知っている方もいないということで，ちょっとしたことで声を掛けてくれる人がいないこともある。いろんな人がいる中では，静かに座ることや話している人を見るという基本的なことがなかなか家庭で伝えられていないということも最近感じる。

・　生活の基本的な習慣に関しては，今の若いお母さんたちは自分たちも朝ご飯を食べないので，子どもにも食べさせなきゃないと思わない方も中にはいる。子どもは子どもでご飯を食べさせて，子どもが食べ終わったら自分がゆっくり食べるというお母さんたちも出てきている状況である。そこで，富谷の中では，常々検診や教室等の機会に基本的なことを伝えていくこともちろん大事だが，食生活や生活リズムのことについては，妊娠して，母子手帳を取りにいらしたときに，じっくりとお話をしていこうと話をしている。

【　気仙沼市家庭教育推進協議会　星会長　】

・　うちの協議会は民間団体で，事務局を生涯学習課の方にしていただきながら，行政とタイアップして利用を進めている。地域で地域の子どもを育てるという視点の下に，なるべく子育て世代の親御さんたちのニーズを把握しながら，事業を進めている。その中のほっとサロンという事業があり，震災後５年目に入った。復興予算から通常予算体系に移っていく中で，どうしても予算が減っていくということがあり，地元の人材を活かした講師を選定し，幼児教育に精通した専門家を発掘しながら，地元の医師や看護師や保健師さん，心理士さんなどを加えて，親御さんの悩みにも即していきたいなと思っている。資料３の最後のページに子育てほっとサロンという資料があるが，前回は歯医者さんに来ていただき，２５組ぐらいの親御さんに集まっていただいた。講師の歯医者さんの話が終わった後に，それぞれ自分の質問したいことを直でお医者さんの方に聞くのに，行列ができた。そこで感じたのは，親御さんたちはＳＮＳなどを利用して，情報をすごく多く得ているが，本当に欲しい情報というのは，我が子への対応の仕方や，個人的な相談なんだなと思った。そこで全体的なアプローチと個人的なアプローチと両方組み合わせた事業を展開していく必要があると思っている。相談してもらえるような関係をまずつくっていくことが大切なので，協議会のメンバーにもいろいろな研修を積ませていきたいと思っている。

【　早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城　太田実行委員長　】

・　基本的生活習慣の確立を目的に４つの報告をさせていただく。

・　まず始めに，早寝早起き朝ごはん運動の一環として，早朝ゴミ拾い清掃活動をしている。仙台駅東口周辺，そして勾当台公園を会場に，参加者は親子連れ，大学生そして地域のみなさんである。今月はジャズフェスティバル当日，早朝より定禅寺通りと一番町周辺を清掃活動した。毎回５０名から８０名の参加をいただいている。

・　２つ目は昨年度「今なぜ早寝早起き朝ごはんなのか」というテーマで川島先生に講演いただき，大変好評で現在第２弾を企画中である。ただ私どもは子育て世代に参加をしていただきたいが，もう早寝早起き朝ごはんを実践されている高齢者の方がだいたい７割いる。ぜひ早寝早起き朝ごはんをやっている子育て世代，こちらに照準を合わせてやっていきたいと思っている。

・　３つ目として，保育園，幼稚園，小学校向けに早寝早起き朝ごはんの出張紙芝居を年間約４０回実施している。今年度も同程度の要請が来ているので，実行していきたい。

・　最後に親子でトイレ掃除をしようというテーマで，今回は栗原市の小学校，中学校，高校６校のトイレをお借りして，８月２１日に実習した。１１００名の参加をいただき，そのうち約３５０名が中学生であった。トイレをきれいにして自分の心もきれいにしようという形で実践をさせていただいた。

【　くりこま高原自然学校　佐々木代表　】

・　今回のアンケートであった一番不足している部分とこれから親御さんが望んでいる自然体験の部分が私の専門であるので，どんな取組か現状をお伝えする。

・　私自身は野外教育，冒険教育が専門で，自然学校という民間の自然体験を提供する事業所をやっている。全国の動きとしては，「森のようちえん」という幼児期に自然の体験，自然の中で幼児教育をしようという，ネットワークができている。２００５年に我々の仲間に声を掛けてつくり，年に１度大きな交流大会があり，今は４００人，多い大会では６００人参加している。アンケートにあるように，小さい子どもたちが自然の中で体験することが望まれているが，なかなかそれを支援するのが難しいと思っている方がたくさんいる。ネットワークには３００団体くらい加盟し，その中には，幼稚園，保育園，認可認証の保育園ももちろんあるが，認可外のいわゆる自主保育で子どもたちを自然の中に連れ出している本当に小さい規模のお母さんたちの組織もある。体験不足を起こしている現状としては，なんとかそういうところが広がることが必要である。今，県レベルでは長野県が信州型自然保育として，県として認証する制度が昨年から始まった。鳥取県は県として「森のようちえん」ということを認証して予算を組んで始まり，今６つ７つの園が認定されて動いていると思う。国レベルの現状としては，認証・認可の規格外ということで動きがない。

・　課題だが，アンケートにあるように自然体験の場面をつくることが望まれているが，なかなかできないということ。その原因はどこにあるかというと私は２点あると思う。まずは親。うちの自然学校は民間の事業所なので，２週間に１回，山で体験の会をやる。仙台の方では週３日，通所型の体験の場を持っている。意識がある親は，そういうアクションを起こす。栗駒は遠く仙台から２時間近くかかるが，わざわざ機会をつくって来ていただいている。でも，機会をつくれない親にとってみれば，身近なところでどういうところがあるかという情

報が必要で，それが入っていないということが原因。２つめは家庭で無理であれば，通わせている幼稚園,保育園でなんとかそういう時間をとってもらえないかなというのが多分あると思う。そういう意味では，長野県と鳥取県の取組はそれを引っ張るような形である。あと私が最近関わっているある他の県だが，保育園から小・中・大学まで持っている学校法人がある。都会の方では，待機児童の問題があるが，かたや地方では，逆に子どもを集めるために苦労していて，それで「森のようちえん」に切り替えたいという相談があった。大きな問題は，現場。現場の先生方がわざわざ自然に連れて行くというのはリスクがあるから，どうしても管理をして安全にというのが優先されれば逆方向である。リスクを踏んでまで，現場の先生方に研修をして,そういうことを踏み出すかどうかというところが課題となっている。相談を受けた大学，学校法人で話をしたら，やっぱり無理かなというようなこともあった。自然体験は子どもたちにいいと言っているが,これからどうやってその現場をつくるかという部分は，リスクを伴って自然に出て行く指導者をどれだけつくることができるか，あるいはそういう場を認める園がどれだけ増えるかということだと今考えている。

【　ＮＰＯ法人まなびのたねネットワーク　伊勢代表理事　】

・　私の立場からは宮城県でいう志教育そして協働教育というところで普段小中高校に携わらせていただいているので，その視点でお話させていただく。

・　現状では，志教育や協働教育という活動をしていると，下は中学生の高校生に上がる年代から,若者の世代で思春期の世代の子どもたちと,その保護者の両方から相談を受けている。その子たちはいわゆるゆとり世代と言われているような世代の若者たちだが,根底を紐解いていくとやはり幼児期のお母さんとの愛着形成が極端に欠けていることが見えてきている。それと同時にお母さんは，どこに相談をしていいのか分からなくて苦しんでいて，思春期になって大変になった状態でどうしましょうという相談をこの数年複数の方から両者同時にいただいているような現状である。小学校で，就学時の入学前の検診とかで志教育の視点でお話ししたり，ワークショップをしたりする中で，どうしても今目の前のことでいっぱいになってしまうのは仕方ないことだとは思うが,何のためにやっているのかということの目的意識を，１年に１回とかでも子育てのこととか教育とか長いスパンで一度考えられるとよいと思っている。長いスパンで考えると少し気持ちが楽になったり，今何をすればよいかが考えられたりするところにたどりつくのかなとは思っている。

・　特に今の若者と接していると，想像力や思考力とかが極端に低下しているように感じている。これを打開したい，なんとかしたいという思いはある。これをやるとどうなって，この先どうつながるというところを考える力が極端に弱いからこそ起きている課題も多いと感じている。そういうゆとり世代の２０代半ば過ぎの子たちがこれからまた親になっていくわけで，そうなったときにまた課題がどんどん増えていくというのが目の前に迫っている。「これがなぜ必要なのか」「これをやることによってどうなっていくのか」「本当に自分がどういう人でありたいのか」「どういう親になりたいのか」とかそういうところの目的意識が極端に欠けているというのを現場に入っていても感じており，１つ１つ丁寧にやる必要がある。

・　もう一つ協働教育では，小中とも地域連携をして子どもたちを地域全体で育てるという動きがある。その仕組みを，今一生懸命教育委員会も作ろうとしているが，そのキーパー

ソンというのがコーディネーターだと思っている。コーディネーターに関しては，ネットワークとか，子どもたちとの関係，地域との関係が作られていく中で，先生がどんなに異動されても，その方たちが活動する中で，つながっていくこととか地域で子どもたちを育むことにつながっているという成果が出ている。一方で，なかなか予算化が難しいという現状があるのも実態である。その仕組みが幼稚園や保育園の方の就学前のところにも仕組みとして下りることが一つ解決策になるのかなとも思っている。

【　河北新報社防災・教育室　鈴木部長　】

・　河北新報の防災教育室は今年４月にできた新しい部署で，私も４月からここに在籍している。それまではずっと編集局におり，いわゆる記者だった。一般市民の代表というか，素人の代表として話させていただく。

・　先程紹介のあった，アンケートだが，平成２８年の回答数が７００くらい増え，それもスマホによる回答が多かったと言われていた。増えるのは大変結構なことだと思うが，１番の「父親が子どもと触れ合う時間」は７４．５％で目標値は大幅に上回っているが，２７年よりはマイナスになっている。１０番の「自然体験活動を何度も一緒にしている」という保護者の割合もマイナスになっている。もしかすると親がスマホで時間をつぶしているためにマイナスになっているんではないのかと思った。このアンケートにはたくさん設問があるので，さらに設問を増やすのは難しいのかもしれないが，「どうして１時間子どもと触れ合う時間が取れないのか」みたいな設問もあると，なおどうすれば学ぶ土台づくりを推進できるのかというところにもつながってくるのではないかと感じた。

・　皆さんのお話を聞いて，新聞の紙面で一番この辺が弱いなあと思っている。例えば教育の記事が載ったとしても，多くは小学校の高学年から中学校，高校とかの年代である。待機児童の話は単発で載ったりするが，発達障害の話なんかもきちんとシリーズでくらし面とかでやったらいっぱい読んでもらえるだろうなと思いながら聞いていた。１０月１日から紙面を改革して，９月３０日までの紙面とは若干変わるが，震災前にあった教育のページは結局ちょっと人手が足りないということがあり，復活できないというような事情もある。皆さんの話を聞いていて，取材のヒントになるようなものがいっぱいあったが，なかなか復興関連の記事に今のところ力点を置いていることもあって，手が回りかねている。

≪　川島座長　≫

・　各委員の先生方から意見を伺ったところで，大きく３つの課題が提起されたというふうに聞き取った。１つは家庭の教育力が低下していることが大きな課題である。一部意識の低い親たちがいるといった指摘もある。これに対して啓蒙活動を図っていくべきだという意見が出てきて，これは今までも注力していたところである。ここからまず議論を進めたいと思う。

・　恐らく委員の皆さまも家庭，例えば親子の愛着関係含めて家庭教育というところで親子の在り方を浸透させなければいけないというという思いは持っていて，それぞれの立場で講座されていると思う。ただそれが実際に広がっていないのは事実である。佐藤委員はＰＴＡの方で会長をされているから御自身でも意識されていると思うが，例えば親の立場として，他の会員の方々を見ていて，私たちが出しているメッセージがどうして浸透していかないのか，ルルブルにしても知っている人の数はほとんどいないし，早寝早起き朝ごはんですら知らな

いと言っている人がこれほどいる。結構熱くメッセージを伝えているつもりだが，浸透していかない。実際に親の立場としてなぜ広がらないと思うか。

【　宮城県私立幼稚園ＰＴＡ連合会　佐藤研修部長　】

・　長期休みに入る前などに，ルルブルと書いた，早寝早起き朝ごはんができたらシールを貼るカラーの台紙などがお便りに入ってくる。毎日，お便り関係がとても多い。しかし，仕事から帰ってきたお母さんたちは,時間の都合もあり,まず幼稚園から配られたお便りを見て,そういったものはちょっと後回しになるという人もいるのではないか。

≪　川島座長　≫

・　多分それが現実であろう。そこを見ていただくために我々は何をしたらよいか。実際にお父さんお母さんたちが忙しくて配っても見ないという現実は認識しているが,どうすれば見てもらえるようになるかということをフィードバックして挙がってこないと恐らく次の一手が打てない。

【　宮城県私立幼稚園ＰＴＡ連合会　佐藤研修部長　】

・　お便りを見る順序としては，もらったものを返すというものはじっくり見たりする。例えば夏休み明けにそういったシールのものをラジオ体操カードのように回収しましょうというような行って来いのやりとりがあれば，ちょっと気に留めてやるのかなというのはある。

≪　川島座長　≫

・　佐々木委員いかがか。

【　宮城県ＰＴＡ連合会　佐々木副会長　】

・　今の保護者は大変忙しいので，お便りやチラシにしても，ああ来てるなくらいで多分右から左に聞いててしまうのかなと思う。私が何をやってほしいと言われたら，多分お金がかかるんでしょうが,学校に来て授業参観のときに一緒に教えてくれる方が着実に私たちも得られるのかなと思う。学校で保護者と会えるときは，年３回か４回の授業参観とか学校行事しかない。総会とか研修会というのは，今の保護者の方はあまり好まないので，やってもあまり人数的に集まらないと思うので，必ず来る学芸会等に１５分，混ぜてやるとかの方が浸透するのではないか。

≪　川島座長　≫

・　中鉢委員，保育所の立場として，例えば園から出した情報を行って来いの形に年間にして出すということは現実問題としてできるか。

【　宮城県保育協議会　中鉢会長　】

・　これは非常に現実的な問題になるが，これからの我々保育現場として，「幼児期の教育でルルブル，早寝早起き朝ごはんを抜くと子どもが小学校，中学校，高校に行って学力伸びない」とはっきりと言って聞かせるように，これからの研修では保育士に，各保育園，保育所

で言うように私が来週の研修から言っていく。川島先生のデータでもいろんな方のデータでも，だんだんと成長の過程で差がついてくる。親が「あっ」と思ったときには遅い。今のうちから，特に幼稚園，保育所時代から，保護者にとにかく「ルルブル」「早寝早起き朝ごはん」をよく浸透させるために保育所，保育園の場からやっていきたいと思っている。

≪　川島座長　≫

・　吉岡委員はいかがか。行って来いの形の情報発信，若しくは園の保護者の集会等で毎回毎回伝えるという努力というのは現実問題可能かどうか。

【　宮城県私立幼稚園連合会　吉岡常任理事　】

・　出しっ放しと判断されても仕方ないかなと思うが，１００人の中で気付いてくれる方が１人でも２人でもいてほしいなという部分で私は話をしたい。配布物は配布物だ。ただ，今年ちょっと切り口を変えようと思った部分は，「家庭で楽しんでいますか」ということ。七夕に小さな笹竹を各家庭に回して，飾り付けをしたところを写真に残して園に持ってきてもらえますかという話をした。親子で写っているような写真を撮ったところもあれば，子どもが誇らしげに笹竹を持っている写真もあり，それぞれの家庭で写真のアングルは決めたようだ。突然でも，昨年までなかった七夕の飾り付けを親子で考えてもらおうということで，取組は全員ではないが，今までなかったことを家族で考え取り組んでくれるといいなと園側の先生方には話をした。家庭の過ごし方について起きている時間や寝ている時間を聞いても，「どんな過ごしをしているか」という部分を聞かないことには次のステップに行けないと思っている。運動会でもまた課題を出すことで，その当日だけじゃないアプローチをして，子どもと一緒に楽しめるような部分を今年はつくってみたいと思っている。

≪　川島座長　≫

・　恐らくポイントは吉岡委員の園と同じようなレベルの私立の園をたくさん増やしていくところだと思う。そこを増やしていくために，行政は何ができるか。行って来いのメッセージを出すといったこと，職員に教育する何かがあれば伺いたい。

【　宮城県私立幼稚園連合会　吉岡常任理事　】

・　行政の文書で，ルルブルがどうのこうのではないが，親の方に案内はするが，行くか行かないかということは別問題。ルルブルのウエイトとしてどこに基準をおくかということ。「こういう話がありますよ」よりは，「キレない子どもを作るのにどういう食文化があるんだろう」とか，現実的な方が多分親には文書的には伝わる気はする。「９時まで寝なかったら子どもの頭は発達しないよ」とかは多分知っていても「うん。知っているよ」というぐらいのこと。恐ろしいような事例を出せというわけではないが，やはりそこまで言わないと多分気付かない親が多くなっているような気はする。そんな意味ではいろんな模範的な話だけじゃなくて，その先にどうなるっていうことがないと多分今の親は動かないと思う。

≪　川島座長　≫

・　伊藤委員はいかがか。

【　宮城県国公立幼稚園・こども園協議会　伊藤副会長　】

・　やはり学期ごとに集まる始業式や終業式で，ルルブルのパンフレットを用いて，また家庭教育学級の園長の講話といったところで保護者に発信するという大事な役目があるのではないかと考えている。それをどう伝えていくかが大事で，それを保護者が理解し，共感した上でやっていくということが一番成果につながると思っている。今，親子の連携ということを副主題に，そういったことを研究に入れている。今年度は保護者がクラスで絵本の読み聞かせをしている。どんな絵本を読み聞かせたらよいか担任と話し合いをして，お母さんから絵本の読み聞かせをしていただく。あと七夕飾りを保護者に作ってもらったり，短冊の願い事も親の方から書いてもらったりしている。発信して受けて，さらに「こういうのもありましたよ」と返してやるというのが大切。一方的じゃなく，どっちももらったり受けたり，発信したりということを心がけているのが今の取組である。

≪　川島座長　≫

・　県の方も，各園が努力してうまくいっているところの情報を集めて，行って来い含めて，どういう情報発信の仕方がよいかをまとめて,それを全ての園に開示するという努力をぜひしてもらえればと思う。太田委員も地域でまさにそこを一生懸命やっていらっしゃるが，効く人には効くが，やはり多くには広がりきらない。ジレンマを抱えつつ，こういったサポートがあれば太田委員の活動がもっともっと浸透して各家庭に入っていくという何か思いがあれば伺いたい。

【　早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城　太田実行委員長　】

・　先程申し上げたとおり，川島先生の講演会を企画して，私どもはこういう方に参加して欲しいという願いがあったが,もう早寝早起き朝ごはんを実践されている高齢者が大多数である。この方々は河北新報さんに出るともう即刻そこから申込みされる。実を言うと小学校の方にチラシを約２，０００枚作って，子どもさんたちに渡してくださいと依頼をしたが，そこから返ってきたのは，ゼロであった。チラシを作って，学校の方にお願いしてもできないとすれば,一番動員をかけるのはやはりマスメディアである。河北新報さんのようなところ。しかしそれだと先程申し上げたように高齢者がいらっしゃるという本当にジレンマを抱えている。

・　もう一つは私どもは予算が全くなく，ゼロからスタートしているから，予算がないと動きも取れないという状況である。実は今日もこれから例会があるが，その中で，会員を募集して，正会員には年間１，０００円いただいて，それを軍資金にしてやっていこうというようなことで考えている。

≪　川島座長　≫

・　片山委員，小学校が協力してくれないという話があったが，いかがか。

【　宮城県小学校長会　片山理事　】

・　申込みがゼロということで残念だと思う。言い訳ではないが，大変多くのものが配布されている。学校から出るものもあるし，後は関係団体や諸団体様々なものがある。学校という

フィルターを通すと全てに配布できるので，たくさん来る。保護者の方々もそういう意味では，身につまされる内容あるいは切迫感がある内容，これを聞きに行かなければという内容にどうしても優先順位を付けていきがちなんじゃないかと思う。そもそも今の保護者の方々は忙しくて，なかなかそういった講演等に顔を出せないというのも事情としてはあるのかなと思う。今後も学校は変わらずに努力していきたいと思うのでよろしくお願いする。

≪　川島座長　≫

・　今の議論で，園のレベルでも重要な情報は行って来いの形にして，保護者が手を取らざるを得ないような工夫をするという話をしている。しかし，私自身の経験からも小中学校は結構壁があり，情報を出したくても自分たちで勝手にフィルターをかけて，情報を絞り込んでいるというのが事実だと思う。例えばＮＰＯ法人が出したいといったような情報というのは学校の方のフィルターで落ちることがほとんどだと思う。学校側としてこれは重要だから見てほしいという重み付けをつけるというより，公平性を担保するというところに恐らく教育委員会も学校現場もしていると思うが，そこら辺が伝わって欲しい情報が伝わらない理由の一つかと思うが，教育委員会，どうか。

【　宮城県教育庁教育企画室　伊藤室長　】

・　私どもの方で，それぞれの学校現場の取扱までは把握していない。常々学校現場で配布物が多くて，なかなか大変だという話は聞いている。その中でフィルターをかけているかどうかというのは，申し訳ないが承知していない。

【　宮城県教育庁　西村次長　】

・　少し補足すると，ＮＰＯということで各学校に直接持って行かれると，やはりフィルターがかかってしまうかもしれない。中身がどの程度のレベルなのか，後援を県の教育委員会がしているのかどうかとか，そういったところも学校側で協力するポイントの一つになると考えている。教育庁の方で，例えば義務教育課の方に御相談いただいて，ルルブル運動とか県のそういった事業に協賛できるようなものであれば，こちらから各学校にお願いするという方法で各学校に周知するということができるかもしれない。

≪　川島座長　≫

・　民間の活動を現場に周知する方法として，県教委の協力を得て，後援といった一文字をもらった上で，出してもらうと素直にいける可能性が少し出てくるということは，いい案だと思う。最後に，今まで我々は家庭の教育力が低いという危機感を持っていて，行政も含めて，メッセージは出しているが浸透しきらない。メディアの協力といったところもないと今の社会は浸透しきれないのも事実だと思うが，鈴木委員，メディアとして，なぜ協力してくれないのか。

【　河北新報社防災・教育室　鈴木部長　】

・　決して協力してないつもりはなく，我々も一人の市民で，親でもある。皆さんからこういうのが子どもたちにいいですよと言われれば，記事で紹介したいと考える。

・　私はＮＩＥ委員会の事務局長でもある。学校現場に「新聞で授業をやっていただけると，このとおり学力が伸びるデータもありますよ」という話もしているが，なかなか実践校に手を挙げていただけない。皆さんがおっしゃっている若いそれこそ２０代後半から３０代ぐらいの親が，今話に挙がっていると思うが，そういう方々にも新聞をなかなか手にとっていただけない。学校にお邪魔すると，今度は学校の先生方も忙しくて，「新聞取ってないんだよね」というような話もされて，「やっぱりそうですよね」としかならない事情もある。情報があふれているが，あふれている情報の中からなかなか選択してもらえないというのは，我々と皆さんの悩みは共通していると思って聞いていた。
・　新聞として，どうすればもっと取り上げて皆さんの要望に応えられるかというと，ただ記者クラブにこういうのを投げ込むだけはなくて，もう少し個人的なアプローチをして，記者と関係を持つような機会があるといいと思う。書かざるを得なくなるような関係になるというのが一番手っ取り早いと思う。

≪　川島座長　≫

・　２つ目に多分提起されたのは，家庭の教育力低下ともからむが，現代社会ならではの問題点ということで，１つはお金の問題。予算が足りないということ。これはもう行政側も現場側も地域のコーディネーターという立場からもやっぱりお金が足りないということが支障になっている，ということが挙げられている。教育というところは未来を支える一番大きなところであるので，教育にお金をもう少し回して欲しいということがこの連絡会議で各委員からいろんなレベルで出てきたという話はぜひ知事さんに伝えてほしい。
・　もう一つ，現代社会ならではの問題点。これから教員になる，それから親になる子どもたち，若者たちに自然体験とか運動体験，幼児期の愛着形成が不足しているという指摘がある。これら全て，今我々が議論している幼少期の子どもたちをどうするかという問題と全部絡むが，ただそういう子たちが現実問題として大人になってきているというところは，手の打ちようがなく，頑張って教育すると言ってもしきれないところも当然あると思う。社会問題としてそういうものだと認識した上で話を組み立てていく必要はある。ただ，今までの議論の中で出てきた親になる人たちへの教育をするというところは，やはり重要だということをぜひ認識して，県の施策に反映してもらえればと思う。
・　自然体験をどう親になる人たちに増やすかというプログラムは結構難しいところだと思うが，佐々木委員，親の自然体験を増やすということがエッセンシャルな気がするが，それを視野に入れた活動というのは展開し得るものなのか。

【　くりこま高原自然学校　佐々木代表　】

・　私の自然学校のプログラムで親御さんと一緒に来ている方々はいる。そこに来ている方は意識があって来るので問題ないと思う。問題は，アンケートにあるように８割ぐらいの方が，そこに意識が行っていないこと，あるいは，実際にそういうところに連れ出したり，そういう場に行ったりできないということなので，そういう方々をどうしたらいいのかがポイントである。我々は，子どもたちのプログラムで「森のようちえん」をやっており，親御さんはその時間に「子育てカフェ」ということで，親御さんを通したプログラムをやっている。そこで意識が「気が付いた」「より考えるようになった」お母さんが，近くの子育ての仲間を

連れてくるというケースはあるので，現場としてできるのは，そこが限界と思う。現場でお母さん方と子育てに関してやりとりする場を増やすということと，さっきお話したように全然そういう環境にない人たちをどうやるかということを，私自身，さっきのメディアも通じての話も含めトータルに訴えていかなければならないのかなと感じている。

≪　川島座長　≫

・　これから解決すべきというか，問題点だということで共通認識まではよいか。

【　くりこま高原自然学校　佐々木代表　】

・　あとは自然体験が大事だと言われているが，私は専門でずっとやってきたので，苦になく子どもたちと自然の中に入るが，多分多くの先生方とか幼稚園の現場の先生方とか保育士さんとかが，園として「自然の中に子どもたちを連れて行くよ」と言ったときに，リスクを背負う，あるいは今までやったことがない，言ってみればめんどくさいことが発生するので，多分退くと思う。でもあえて子どもたちにとってそこが大事だということを踏み越えられる方々を増やすしかないと思う。あえて大変だけれども「やりましょう」と踏み出す。親，幼稚園あるいは小学校の先生，園長さん校長先生，教育委員会も含め，あえてめんどくさいことが増えますけども，「やりましょう」と確認したい。自然体験が大事だと言っているが，結局「いや，めんどくさいのやりたくないな」となってしまえば広がらないのでそこがポイントと思う。

≪　川島座長　≫

・　限られた時間のリソースをどう割り振るかという問題である。そういう意味では，教員が忙しすぎるという根本的な問題ともつながる話だと思う。もう少し余裕が出てくればそういった活動も広がりやすいという気がする。そこは社会的に大きな問題で恐らくこの連絡会議で解決する，県教委がどうするというレベルの話ではない気はするが，我々の活動が，回り回っていい方向に向かって行くのではないかという予感はする。

・　３つ目のポイントは，幼保小連携接続のシステムと質の比が低いということが各委員から出てきた。その中で行政として県の教育委員会にやっていただけることの可能性があるものというのは，例えば各地域の行政のいろんな部局がそういったシステムの中にきちっと入ってくるような指導のシステムをしっかり作り上げるということがまず一つだと思う。あとは先程も意見があったが，私立の幼稚園のようないろんな地域から来ているところの接続をどうするかというところは，現実問題から目をそらさずに教育委員会としてしっかりとお考えいただきたいと思う。これを園に投げるのは無責任な気はする。現実的に地方は幼稚園と小学校が１対１の可能性があるが，仙台市内の私立幼稚園となると，上がる小学校はばらばらになる。そこの連携をどう考えるのか，多対多の関係みたいなものを考えていかなければならない。現場に任せるというのはあり得ないので，行政のレベルでこういった仕組みを作りますということを上から言っていかないとシステムとして動かないと考えていた。相互理解が足りないという話もあったが，それもシステムをきちっと作った上での動かし方なので，今議論しても仕方ないのかなと思っている。あとは，幼保小連携に関して地域をどう活用するかということについても，そこに予算がないと上手くいかないという意見もあったが，地

域の人材をどう活用するかというところまで意識した上でのシステム作りを行政レベルでやっていただければと感じていた。この幼保小連携のクオリティが低いというところに関しては，みなさんいろいろと意見があるかと思うので，あと１０分程で，自由に御発言いただければと思う。まずは吉岡委員にお願いする。

【　宮城県私立幼稚園連合会　吉岡常任理事　】

・　幼保小連携に関して，私が昨年，県教委がステップアップさせるんだなと思ったのは，教育課程での小学校の先生と幼稚園の先生と一緒の幼保小連携の研修である。しかし，１回で終わってしまった。今まで基礎ができているわけでもないのに１回きりで終わるっていうのはどうなのか。さっきのアプローチカリキュラムにまだこだわって話をするが，何もないところで，幼稚園側からの姿の部分だけの発表で終わっていた。実際の組み立てとして，子どもの育ちをどう考えて，判断したらよいかという部分がない。幼稚園のレベルで言うと，指導要領というのがあり，その中で，どの部分がアプローチとして学校の接続になるのかが分からない。具体的に分かりやすくお話すると，アプローチカリキュラムというのは，３年間続けてやるのではなく，文科省で出しているのも小学校に向かうために5 歳児の１０月からの半期分のカリキュラムで，どういう部分を育てるかである。小学校の先生たちは小学生になってスタートするという辺りが私は一番もどかしい。私は毎年こんなに「アプローチ」「アプローチ」と言っているが，なんでアプローチを無視するのかと思う。決して作ってくれということではなく，私も自分なりに作っているのがある。それはそれで各園の方に，委ねればいいと思うが，１つ残念なのは，各園の方でもモデルがないと進まないというのが大きい。幼稚園の教育要領，保育園の保育指針それぞれがどうのという話ではなく，これからどうするかという部分が大事。認定こども園もでき，宮城県は保育園，それから幼稚園，認定こども園を認めているのだから，認めている中で，カリキュラムの接続がないというのは，致命的な欠陥だなと私は思っている。幼稚園から学校に言ってもなかなか通らない。でも行政によっては，村田のように進んでいるところもある。仙台は園数ばっかり多くて，全然だめ。かえって地方の方が，アプローチという考え方は出ていると思う。現場の幼稚園の職員も学校の先生たちもアプローチという考え方を知らないと，交流しましょうと言っても，顔を出すだけの交流で全然中身のない交流になる。子どもの育ちを理解する交流にならないと私はステップアップしていかないと思う。難しいことではないと個人的には思っている。示唆する部分がないと学校の方も受け入れ体制ができない。もう一つ付け加えて話をすると，幼稚園で年長になっていろんなことができている子どもたちを，小学校に行った途端，何にもできないという目で見られてしまう。その部分から直し，小学校で受け入れる先生たちは子どもができることを認識してもらうとありがたい。未だに幼稚園でやっているような手遊びをしてそれがスタートカリキュラムだと思っている。そうではないと思っているので，示唆するものを早く立ち上げてもらうとありがたいと思う。

≪　川島座長　≫

・　県の方から何かあるか。

【　宮城県教育庁教育企画室　伊藤室長　】

・　研修の件は，少し確認をしたいと思う。実は教育企画室でも研修会で，今年度初めて小学校の先生にも来ていただき，幼稚園，保育所の先生と一緒にワークショップを開かせていただいた。それについては，継続して幼保小連携の基礎部分として続けていきたいなと思っている。あと，アプローチカリキュラムの部分は，私立と公立の接続の広がりがあるので，県としてのモデルがないとなかなか連携と言っても具体的に難しいといった話はもっともかと思う。吉岡先生のところのカリキュラムをぜひ参考に，また他の都道府県の状況も調べさせていただいて，研究をしてみたいと思っている。

≪　川島座長　≫

・　片山委員，幼稚園側からの思いのたけが今出たが，小学校の方はどうか。

【　宮城県小学校長会　片山理事　】

・　大変参考にさせていただきたいと思った。先程ちょっとお話したが，接続期のカリキュラムは，手元にも文科省で出したものがあるが，小学校はゼロからのスタートではないということで，幼稚園のアプローチで積み上げたものを，幼小一体になって，また更に積み上げていく発想が大事だと思う。実際には幼稚園はまず遊びを通して学ぶということで，遊びから様々な人間関係や，あるいは言葉の広がり，そういった遊びを通して学ぶといった基本的なことを小学校でも理解して，小学校の教科とのつながりや日常の生活での発展等を共通理解して，１か月だけではなくて２か月３か月といったようなスタートカリキュラムを作っていくことが重要だと改めて思った。

≪　川島座長　≫

・　小泉先生。先生の専門とは違うと思うが，大学の方で幼小保の接続について何らかの問題意識を持った教育なり研究なりなされているのか。

【　尚絅学院大学　小泉准教授　】

・　私の学科は心理学科なので，私のところでは行っていない。

【　宮城県小学校長会　片山理事　】

・　先程の村田の件だが，村田と白石もそうだが，幼保小連携事業というのをかつて受けていた。そういった中で，カリキュラム作りにも取り組み，町ぐるみで取り組んだのではないかと思う。恐らく県の事業なので，他の市町村に広まっていけば，モデルとしていいのかなと思った。

≪　川島座長　≫

・　そろそろ時間になってきた。言い足りなかったこと等あったら，ぜひ県の方にメールでもペーパーでも結構なので，出してほしい。特に行政がここに手を入れてくれたら自分たちの思いが通じるんじゃないか，実現できるんじゃないかというところはぜひ県教委の方に挙げてもらえればと思う。家庭をどうして欲しいというのは無茶である。ただ県教委として，こ

ういったシステムを作っていただけたら自分たちの願いが叶う可能性があるということに関しては，積極的に意見を投げていただけばと思う。

その他

【　宮城県私立幼稚園連合会　吉岡常任理事　】

・　前回もお話ししたが，実態把握のアンケート調査をしているが，数字だけで評価している部分にかなり盲点があるように思う。同じ内容のアンケートを実施しているが，昨年の子育てしている親と今年の親は違うのに比較がいるのか。むしろ家庭で何を楽しんでいるかという部分を聞いていかないと広がらないと思う。父親が３０分しか子どもと関わっていなくても，時間を惜しみながら関わっている親の方が，１時間だらだらと過ごしているよりいい触れ合いをしているかもしれない。決して長ければいいというわけではなくて密度のある関わりが分かるような調査ができるとよいと思う。中身的に探るようなアンケートの形でないと評価するのは大変と思う。次回またやるのであれば，再度検討して欲しいなと思う。それからランダムに調査することはスマホで回答数が増えよいのかもしれないが，いいかげんな回答が多くなるとただの数集めになってしまう。各園でこの親に話を聞きたいと依頼したことが最初の頃はあった。その後はランダムになり，データとして数字を起こしていても責任的な部分は存在しないと思っている。

【　ＮＰＯ法人まなびのたねネットワーク　伊勢代表理事　】

・　会議が終わる前に一言だけ，提案として意見させていただきたい。今，ルルブルや学ぶ土台づくりを広げることを考えたときに，親へのアプローチで話が進んでいると思うが，大人の意識を変えることは非常に難しいことだと感じている。うちの団体で意識しているのは，子どもたちが変わっていけば親も周りの大人も変わるということ。そう考えたときに，幼児期の素直な子どもたちだからこそ，ルルブルという言葉をリズムに乗せて，意味みたいなのを子どもたち自身が口ずさめるようにし，歌みたいな感じにし，子どもの方から大人側へアプローチする方法を考えたらどうかと思っている。これの目的を考えたときに，これから今の子どもたちもいずれは大人になっていくし，自分で自立するところを考えるならば，親からのアプローチだけではなくて，子ども自身が学んで自立に向けていくという力をこれからの中ではつけなければならないと思う。紙媒体も大事だが，幼稚園や保育所の子どもたちにも分かるようなキャラクターとか，音と映像と体の動かし方とがセットになってできるようなものがあるといいと思っている。資料を見ると「ルルブルロックンロール」と書いてあるが，初めて知った。紙芝居についても，これがどういうふうに子どもたちに影響があって，どこまで浸透しているのかも分からない。親へのアンケートも大事だと思うが，子どもたちにルルブルを知ってるかを聞くというのもありなのかなと思った。

以上